

カントの『天界自然史』における人間観

Image of Human Being in Kant's *Natural History of Heavens*

笠井 哲

福島工業高等専門学校一般教科

Akira Kasai

Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2013年9月9日受理)

Kant's Natural History of Heavens was given the Friedrich second in 1775. This *Natural History of Heavens* is one ambitious work for Kant oneself. And it is known to have demanded the big significance and the value from the theory. This book is the book of the natural science, but cannot say with the simple natural scientific book or the astronomy book. This is because the image of human being is spoken with this book. The purpose of this paper is to consider the human being in Kant's *Natural History of Heavens* and is to clarify the position of the human being in the space whom he thinks about.

Key words: Kant, *Natural History of Heavens*, natural science, astronomy, image of human being

1. はじめに

カントの『天界の一般自然史と理論 別名、ニュートンの諸原則に従って論じられた、全宇宙構造の体制と力学的起源についての試論』（以下『天界自然史』と略す）は、1775年にフリードリヒ2世に献ぜられたものである。不運にも印刷中に出版社が倒産し、差し押さえ処分を受けたために、一般にはほとんど知られることがなかった。

しかし、本書の出版より6年後の1761年には、哲学者・数学者であると同時に、有名な天文学者でもあったランベルトが、『宇宙の配置に関する宇宙論的書簡』において、カントが上の『天界自然史』で述べたのほとんど同一の理論を発表した。そこで、カントの書を知らなかった世人は、この理論に注目し、ランベルトが、この理論を最初に発表した学者であるかのように称賛した。それでカントは、1763年の『神の現存在の証明』の一つの註において、この点に触れて次のようにいう。「この書より6年後の1761年に出たランベルト氏の『宇宙論に関する書簡』における、全宇宙の体系的構造、銀河、星雲などの理論は、私の上述の天体論の第一部、およびその序言において述べておいた理論と全く同じものである」¹⁾と。

これによっても、この『天界自然史』は、カント自身にとっても一つの野心作であり、彼自身がこの書で

述べた理論に、大きな意義と価値を求めていたことが知られる。実際カントは、この書でいわゆる「カント・ラプラス星雲説」の創始者といわれるようになった。

この『天界自然史』は、題目からも予想されるように、「ニュートンの諸原則」によって、全宇宙、特に太陽系の起源と構造、および諸惑星における住民について論じたものである。その内容は、三篇からなる。第一篇では「恒星間の体系的状態の概要」が、第二篇では、「自然の最初の状態、諸天体の形成、それらの運動の諸原因、および特に惑星系における、また全創造に関する諸天体の体系的連関」が、そして第三篇では「自然の諸類比に基づいて種々な惑星の住民を比較する試み」が論ぜられている。

したがって、この書は自然科学的著作であるが、単なる自然科学書あるいは天文書とはいえない。というのは、この書の第3篇においては、彼の自然観、世界観のみならず、諸惑星の住民、特に地球上の住民としての人間についての見方、すなわち彼の人間観が、豊富に示されているからである。たとえ、「人間論はいまだ自然論の一部として語られる」²⁾のであっても、当面我々にとっては、彼の人間観に重要な意味を認めるのである。

本稿の目的は、『天界自然史』におけるカントの人間観について考察することである。

2. 宇宙の構造と世界観

この書に示された世界観や人間観は、もとよりここで試みられた宇宙論の体系に基づくものであるから、彼の後年の批判哲学、批判倫理学に基づく世界観、人間観とは自ずから異なっている。

しかし、ここに示された世界観、人間観の中には、後には全く不問に付されたり、否定されたりしていくものもあれば、批判期以降においても一貫して保持され、いっそう洗練され、深化されていくものもある。

前者に属するものは、カントがここでまず世界を「最も単純な混沌状態へ還元してから、引力と斥力以外の如何なる力をも、自然の偉大な秩序の展開のために用いる」²⁾ だけでなく、そうした「憶測を物理的諸関係の導きの糸にそって忠実に遂行してきた」³⁾ 宇宙の起源と構造に関する仮説、およびこれに基づく単なる物理的・機械的人間観の側面である。

それに対して、後者に属するものは、そうした宇宙論の「体系と宗教」⁴⁾ とが、いいかえれば、そうした機械的自然観と神の創造に基づく目的観とが、一致・調和するというカントの確信、および与えられた人間本性としての理性、ないし精神の能力に対する深い信頼とであるといえる。つまりこの『天界自然史』には、カントにとって、意図的・仮説的なものと確信的なものとが混在しており、後には前者は不問に付されたり、否定されたりするのに対して、後者はいっそう洗練、深化しながら保持されていくのである。

以上のことを念頭におきながら、宇宙の構造と起源に関して、カントの述べるところを聴いてみよう。

「宇宙構造はその測りえない大きさにより、また、無限の多様性と宇宙構造のあらゆる面から輝き出ている美しさによって、言語に絶した驚嘆を与える。ところで、このあらゆる完全性の表象が構想力を動かすとなれば、他方では悟性を、別種の歎びが捉えるのである。すなわち悟性が、唯一の普遍的法則から永遠にして正しい秩序をもって、いかに多くの華麗さや、如何に多くの偉大さが、流れ出るかを考察するときである。太陽は惑星宇宙において、あらゆる軌道の中心からその強力な引力をもって、太陽系内に存する球体を永遠の軌道をなして公転せしめているが、この惑星宇宙は、我々の見た通り、全くあらゆる世界物質の根本素材が原初に拡散されて形成されたものである。天空奥深くに見出される恒星、一種の豪華を誇示することも見えるあらゆる恒星は、それぞれ太陽であり、相似た惑星系の中心点なのである。このように類推すれば、

これらの惑星系が、われわれの存在する太陽系と同じ仕方、空虚な空間を、すなわち神の現存し給う、この無間の広がりやを充たしていた、元素的物質の極微の粒子から、形成されつくり出されたことを疑うことはここでは許されない。

ところで、もしあらゆる宇宙と宇宙秩序とがその起源において同種のものであることが認められ、引力が無制限かる普遍的に働くが、しかも諸元素の斥力も同じく到るところに働くとすれば、たまたもし無限な宇宙においては、大なるものも小なるものもともに小なるものに過ぎないとすれば、全宇宙はいわば相互に連繫した体制であり、体系的結合体であることを認めたものというべきではないだろうか？それは、あたかも小にしては我々の太陽系の諸天体、たとえば土星や木星や地球が、それぞれ特に独立した体系でありながら、しかも相互に、なおいっそう大きな体系の成員として連関しているようなものであろう。銀河をなすあらゆる太陽が、そこで形成された測りえざる空間中に一点を想定して、それを周って知りえざる原因によって混沌からの自然の最初の形成が始まったとしよう。そうするとそこに巨大な質量、すなわち非常な引力を持った一物体が発生し、この物体がその引力によって、自分の周囲の膨大な領域にわたって、形成途上のあらゆる体系を中心としてこの物体に向かって沈下せしめ、これを周って、ちょうど惑星を形成したのと同じ元素的根本素材が、太陽を周って小規模につくったのと等しい一体系を、全規模において組織することができたのであろう」⁵⁾。

宇宙の起源についてこのように説明したカントは、次に、「しかし、一体この体系的組織の最後はついにはどうなるのであろうか？創造自身は、どこで止むのであろうか」⁶⁾ と自問して、これにこう答えている。

「神の諸性質の啓示せられる領野は、神の諸性質そのものがあるとまさしく同様に無限なのである」⁷⁾。こゝも含め、「所々にライプニッツ哲学の影響を示している」⁸⁾ とされるが、本稿においては検討しない。

また、カントは「創造は、一瞬間の仕事なのではない。創造は無限の実体と物質との産出をもって始まった後、豊穡の度をいよいよ増大せしめつつ、永遠の全契機を貫いて働くのである。……創造は決して完了してはいない。それはもちろんかつて始められたが、しかし決して止むことがないであろう。それは常に、自然をさらに多く登場させ、新しい事物、新しい宇宙を産出するのに多忙である」⁸⁾ という。

ここに、カントの当時の宇宙観、ないし世界観がはっきり描き出されている。ここでは、宇宙は「無限な存在者」としての神によって創造されたものであり、永遠に新しく創造されていくものである。

3. 宇宙における人間の位置

さて、カントはこうした宇宙の住民について、第3篇において、次のようにいっている。「……惑星中の大部分のものには確かに住民があり、そうでないものもいつかはそうなるであろう」⁹⁾と。

ここで彼が「住民」というのは、要するに「生きた存在者」のことを指している。したがって、これには人間のみならず、植物も動物も含まれている。というのは、「われわれは自然全体の中の唯一の生物なのではない」¹⁰⁾からである。

とはいえ、この場合のカントの関心の中心は、決して植物や動物、あるいは人間以外の何らかの「存在者」に向けられていたのではなく、もっぱら「人間」に向けられていたのである。しかし、彼はここで、人間の生理的組織や道徳的性質を、問題にしているのではない。そうではなくて、いわば「宇宙における人間の位置」を問題にしているのである。

この点について、彼はこういっている。「我々ここでは人間をその道徳的性質の面から、またその身体の物理的配置の面から考察しようというのではない。我々はただ、理性的に施行する能力が、またこの能力に従う身体の運動が、太陽からの距離に比例した、人間がそれと結合している物質の性状によって、どのような制限を蒙るかを探求しようと思うのである」¹¹⁾と。したがって、彼がここで目指しているのは、あくまで、彼の当時の宇宙論に即した人間存在の有様であったともいえるであろう。

そうした観点から、カントは諸惑星の住民について、次のように述べている。「種々の異なる惑星の住民が、否、さらにはそれらの惑星上の動物や植物すらもが構成されている素材は、一般に、それらが太陽から遠くにあればあるほど、それに比例してそれだけいっそう軽くいっそう微細な種類をなしていなければならない、その構造の有利な素質をも含めて、その繊維の弾力性はそれだけいっそう完全でなければならない」¹²⁾と。

したがって、「思惟的自然の卓越性。その諸表象の敏速性、それが外界の印象によってえる概念の明瞭生、加うるにそれらを総括する能力、最後にまた実際の行使における機敏性、要するに、この思惟的諸自然の完

全性の全範囲は、それらの在り場所が持つ太陽からの距離に比例してそれらがますます勝れ、ますます完全となるという一定の規則に従うと」¹³⁾と。つまりカントは、ここでは諸天体の住民の性質、能力、使命などは、すべてその天体の太陽からの距離の大小は、その天体を構成する物質の性質を決定し、この性質がその天体の住民の精神的な活動に対する影響や制限を、決定するという物理的・機械的な見地に立っていることに由来しているといえる。

さて、当時の天文学においては、太陽を回る惑星には、水星・金星・地球・火星・木星・土星の六個があるとされていた。そこでカントは、太陽からの距離に応じたその完全性の程度において、地球がその両極端の中央に位するという点から次のように述べている。「人間という自然は、存在体の階梯の中でいわば最中央の段階を占めるもので、完全性という面からは両極端をなす二つの限界の間で、その両極から等距離にある真中に見られるのである」¹⁴⁾と。

ここに述べられた二つの完全性とは、いうまでもなく純粋な物質と純粋な精神（あるいは理性）を意味する。人間はその二つの中間的存在者として、単なる物質的存在でも、単なる精神的（理性的）存在者でもない。人間は、地球の「物質」に結びつけて創造された「理性的存在者」なのである。

そして、地球よりも太陽に近い、水星、金星などの住民は、人間よりもいっそう強く物質に結びつけられている。これに反して、地球よりも、太陽に遠い木星・土星などの住民は、人間よりもいっそう理性的・精神的である。このように、推測した後、カントはホープの詩句を援用しながら、次のような意味のことをいっている。地球上のグリーンランド人やホッテントット人も、水星や金星では一人のニュートンたり得ようが、地球上のニュートンも、木星や土星では、一匹の猿として驚嘆されるであろう¹⁵⁾。

しかし、ニュートンの力学的法則を太陽系の住民の性能にまで適用したこのような機械的人間観は、「最高の知恵」としての神の計画、ないし「摂理」とはどのような関係を有するのであろうか。この点に関して、カントは明確にこういっている。

「あらゆる自然的運動の力学は、最高理性の計画と結合の全範囲において、おそらく一致するような諸結果をのみ目指す本質的な傾向を、持たねばならないのではなからうか？これらの結果が、そこから展開されるあらゆる力学的性質は、一切のものがそこにおいて

必然的に相互に関係し相合わねばならないところの、神の悟性の永遠の理念に基づく自己の決定を、それ自身持つのであるから、力学はどうしてその始まりにおいて、無目的な努力や無統一な分散を持つことがありえようか？」¹⁶⁾と。要するに、カントはここで自然運動の力学、およびこれを適用した機械的人間観は、神的悟性の計画、ないし摂理から逸脱するものではなく、むしろ、それに一致するものだということをいおうとしているのである。

そして、彼はわれわれが自然をより詳しく知れば知るほど、それだけ事物の普遍的諸性質が、相互に無関係なものではなく、むしろそれらの性質が「本質的な親和性を有し、この親和性によってそれらの性質が完全な体制を構築するように、相互に支えあうよう自ら配慮されている」¹⁷⁾と見ている。それでカントは、結局次のようにいうのである。「かくて元来自然の全範囲にわたって、全てのものは連続した段階的系列をなし、一切の成員たちを、相互に関係せしめる永遠の調和によって連関している」¹⁸⁾と。

4. 人間の理性

カントはおよそこのように述べて、力学的法則を適用した機械的世界観、人間観と神の創造に基づく目的論的世界観とが、本来矛盾するものではなく、むしろ両者は一致・調和するものであるという観点から、宇宙における「人間の間接的位置」を描き出したのである。そしてこの点から彼は、地上の人間には、道徳的能力と使命に関しても、中間的位置が与えられているのではないかと考えていくのである。「叡智と非理性との間をなすある一定の中間階層は、罪を犯すという不幸な性能に属しはしまいか？」¹⁹⁾。

太陽から遠く隔たった天体の住民たちは、罪に陥るには「あまりに崇高であり、賢明である」のに対して、太陽に最も近い、下位の惑星に住む者は、「あまりに強く物質に縛りつけられ」、そのために、おそらく自分の行為の責任を持ちうる能力を、持たないのである。「地球と、そしておそらく火星、この二つだけが危険な中間道路をなすことになるだろう。すなわちここでは、感性的刺激の誘惑が精神の支配を阻んで横道に免れさせる強い力を有する」²⁰⁾。しかし、そこでの住民が、精神によって感性を支配する能力を弱いながらも備えていることは否定できない。そこで、「物理的性状においても道徳的性状においても、二つの極点間の中間的立場」に立つ者としての、人間に特有な性

能が明らかにされる。

「抽象的諸概念を結合し、達見を自由に用いることで情熱への傾向を支配する能力は、後期において現われるが、ある種の人間においては、全生涯を通じて全く現われないものもある。しかしすべての人間を通してそれは弱い。それはやはりそれが支配すべき下層の力、それを統御することに人間本性の特権が存するような下層の力に役立つのである」²¹⁾と。

これによって、人間には、「抽象的諸概念を結合し、達見を自由に用いることで情熱への傾向を支配する能力」とこの能力によって支配され、統御されるべき「下層の能力」とが具わっていること、そして前者は一般に弱い、しかしこれが後者を支配し、統御するところに人間「本性の特権」が存すると見られていることは、明らかであろう。したがって、我々がここで注意しておかなければならないのは、それこそが人間の優越性を示す、「情熱への傾向を支配する」ということが、ここでは「抽象的諸概念を結合し、達見を自由に用いる」ことによってなされる、と見られていることである。

この「抽象的諸概念を結合し、達見を自由に用いる」能力は、彼の批判期以降の用語をもっていえば、広義の「理性」を指していると思われる。しかし、より詳しくいえば、「実践理性」と区別された悟性、ないし理論理性を指している。

このことは、上の引用文において、「抽象的諸概念を結合し、達見を……」と述べられているだけではなく、彼がこの能力を「理性的に思惟する能力」²²⁾とも表わし、またこの能力を有する人間を「思惟する存在者」²³⁾とか、「思惟する被造者」²⁴⁾と呼んでいるところからも明らかであると思われる。

そして、このような「思惟する」能力としての悟性、ないし理論理性が、ここでは、それこそが人間の優越性を示す、「煩悩の性癖を支配する能力」と見られているのである。このことは、カントの次の命題によっても知られるであろう。

「悟性の洞見は、それが完全性と明瞭生とのしかるべき度をもつときには、感性的な誘惑よりもはるかに生き生きとした刺激をそれ自身に有し、感性的誘惑を圧倒的に支配し、それを征服することができるのである」²⁵⁾。

ここでわれわれが見落としてはならないのは、カントが用いる「悟性」あるいは「理性」は、単に感性に対する意味での悟性、あるいは知性のみを指している

のではないということである。このことは、先述の引用文「悟性の洞見は、それが完全性と明瞭生とのしかるべき度をもつときには……」を挟んで、その前後にカントが次のように述べているところからも、容易に知られるであろう。

「あの最上層の天界圏の幸運な存在体が持つ洞見は、認識におけるどんな進歩にも、到達しないことがあるのか！ その洞見が輝き出るとき、彼らの倫理的性状に、どのような美しい結果がもたらされないだろうか！ 悟性の洞見は、それが完全性と明瞭生とのしかるべき度をもつときに、感性的な誘惑よりもはるかに生き生きとした刺激をそれ自身に有し、感性的誘惑を圧倒的に支配し、それを征服することができるのである。あらゆる被造物のうちに現われる神性自身が、これらの思惟的自然のうちに、如何に荘厳に現われないであろうか！ これらの思惟的自然は、情欲の嵐によっては動かされない大海のように、神性の姿を平静に受け容れ、反映しているのである」²⁶⁾。

ここで「最上層の天界圏」といわれたものは、いうまでもなく太陽から最も隔たった惑星、すなわち冥王星を指している。この星の存在者の洞察は、太陽系どの天体の住民よりも優れたもので、その洞察の輝きは、直接に彼らの倫理的性状にも反映して、美しい結果をもたらしている。ところで、根源的には、創造者としての神に基づく神性は、あらゆる被造物に現われているが、なかんずく、そうした最上層界の「思惟的自然」の内に、最も荘厳に現われているこの自然は、どのような嵐によっても、動揺させられない海のように、神性の姿を静かに受け入れ、それを反映している。これが、上の引用文の大意である。

しかし、このような「思惟的自然」をその特質とする理性的存在者、人間においてカントが特に注目しているのは、われわれ人間の「心霊」ないし「精神」とその不死生とである。このことは、彼がこの書の結論において、次のように述べているところからも、容易にうかがわれうるであろう。

「空無が人間的自然に関与することを要求された後では、不滅なる精神が迅速な飛躍をもって一切の有限なものを飛び越えて、最高存在体とのより密接な結合から生ずるところの、全自然に対する新しい関係のうちに自己の存在を持続するであろう。……

事実もしわれわれがこのような考察をもって、また前述の考察をもって、自分の心を充たしたとすれば、晴れた夜、星輝ける天を見るとき、ただ高貴な魂のみ

が感ずる一種の満足を与えられるのである。自然の普遍的な静けさと感官の安らいとによって、不滅な精神の隠された認識能力は、いいえざる言葉を語り、解きえぬ概念を与える。それはまことに、感じられはするが記述されない概念である。もしもこの惑星の思惟的被造物の間に、かくも偉大な対象があらゆる刺激をもって彼らを魅了するにもかかわらず、やはり固く空無に隷属して、それに執着できるような卑賤な存在体があるとすれば、この球体は何と不幸なことであろう！ 彼がそのような哀れな被造物を育てたとは。しかしまた彼は他面において、何と幸運なことであろう！ 彼には、最も受け容れるに値する諸条件の下で、あらゆる宇宙天体における自然の最も優れた整備を、達成しうる能力をも無限に遠く越えて耳ゆるところの、幸福と高貴さとに達する道が開かれているから」²⁷⁾。

ここで、「不滅な精神の隠された認識能力」と表されたものは、先述の単なる知的洞察力としての悟性ではない。それは、何らかの現実的なもの、有限なものを知解する能力であるのに対して、この「隠された認識能力」は、理性本性の最も内奥にあって、そうした有限なものにとらわれることなく、むしろそれを越えて、無限なもの、永遠なものを感じ取る能力である。そしてカントは、われわれに与えられているこの優れた能力によって、あらゆる有限なものを越えて、無限なもの、永遠なものにまで自己を高めてところに、人間の真の「幸福と高貴さとに達する道」が開かれていると見ているのである。その意味において、彼はここで理性的被造物としての人間が、全宇宙の永遠と秩序に自己をおいて、自らの浄福に安らう姿を描き出しているといえる。

5. おわりに

以上のように見られるとすれば、カントの家庭教師時代最大の成果ともいえるこの『天界自然史』は、後年の批判期倫理学との関連において、次のようにいうことができる。

第一に、ここに示された「被造物」としての人間観、「惑星体系の中間構成員」である地球の住民としての人間観は、後年の「批判倫理学書」における人間観の基礎となっている。この点は、例えば彼がそこで人間を指して「理性的被造物」²⁸⁾とか、「理性的ではあるが、有限な存在者」²⁹⁾と呼び、また道徳の原理は「人間のみならず、あらゆる理性的存在者に対しても、同様に妥当しなければならない」³⁰⁾とか、「人間および

あらゆる創造された理性的存在者にとって」³¹⁾などといつて、あたかも人間以外にも、人間と同様な理性的存在者がいるかのような表現を、しばしば用いているところからも容易にうかがわれるだろう。

第二に、この『天界の自然史』では、宇宙における人間の間接的位置が与えられ、そこから人間の間接的性能、すなわち感性と悟性あるいは理性という二重の性能が既定された。この性能は、そのまま人間存在のあり方、あるいは道徳的生き方を指示するものと見なされた。これは、自然が人間にそのような能力を与えた目的、つまり「自然の目的」を反省することによって、人間の存在の目的を自覚するという方法である。

この方法は、批判期以降においても、いっそう洗練された仕方でも保持されている。それは、例えばカントが『道徳形而上学の基礎づけ』の初めにおいて、自然が人間に理性を与え、「本来の目的」、「自然の本来の意図」は何であるかを問うことによって、はじめで人間の「理性の真の使命」³⁴⁾を判定していることから明らかである。

第三に、この書の結語にある「晴れた夜に、星輝ける天を見るとき、ただ高貴な魂のみが感ずる一種の満足を与えられる。自然の普遍的な静けさと感官の安らぎによって、不滅な精神の隠された認識能力は、いへざる言葉を語り、解きえぬ概念を与える」³⁵⁾という文章は、『実践理性批判』の「結語」における次の名句と軌を一にしている。「それを思うことしばしばにして、また長ければ長いほど、ますます新たに増大してくる感嘆と畏敬の念をもって、心を満たすものが二つある。それは、我が上なる星のきらめく大空と我が内なる道徳法則である」³⁶⁾。ここには、人間を無に等しい存在とみる「ペシニズムを凌駕する宗教的オブティミズム」³⁷⁾を認めることができる。

これらのことを考え合わせると、次のようにいっても、過言とならないであろう。カントの倫理学の基本的な性格は、『実践理性批判』に先立つこと30余年のこの『天界自然史』において、すでにその基礎的な素地においてはできていたのであると。

このことは、『天界自然史』が自然科学的なものであり、また一般に彼の宇宙論的・自然哲学的時代のものとして見られているだけに、特に注目に値することであるといえよう。

文 献

カントのテキストは、いわゆるプロイセンアカデミ

一版、Kant's gesammelte Schriften, herausgegeben von der Koniglich Preussischen Akademie der Wissenschaften (KGS) を使用し、その巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で記す。

- 1) KGS. II. S. 68f. Anm.
- 2) 浜田義文：若きカントの思想形成、(勁草書房、1967)、p. 157
- 3) KGS. I. S. 234
- 4) a. a. O. S. 365
- 5) a. a. O. S. 222
- 6) a. a. O. S. 306f.
- 7) a. a. O. S. 309
- 8) ebenda
- 9) 鈴木文孝：カント研究—批判哲学の倫理学的構図(以文社、1985) p. 70
- 10) a. a. O. S. 314
- 11) a. a. O. S. 354
- 12) a. a. O. S. 353
- 13) a. a. O. S. 355
- 14) a. a. O. S. 358
- 15) a. a. O. S. 359
- 16) a. a. O. S. 355
- 17) V g l. a. a. O. S. 360
- 18) a. a. O. S. 363
- 19) a. a. O. S. 364
- 20) a. a. O. S. 365
- 21) ebenda
- 22) a. a. O. S. 366
- 23) a. a. O. S. 356
- 24) a. a. O. S. 355
- 25) a. a. O. S. 354
- 26) a. a. O. S. 367
- 27) a. a. O. S. 360
- 28) ebenda
- 29) a. a. O. S. 367 f
- 30) KGS. V. S. 83
- 31) a. a. O. S. 25
- 32) KGS. IV. S. 447
- 33) KGS. V. S. 81
- 34) KGS. IV. S. 395f
- 35) KGS. I. S. 367
- 36) KGS. V. S. 288
- 37) 川島秀一：カント批判倫理学—その発展史的・体系的的研究—(晃洋書房、1988) p. 55